

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

偶然と驚きの哲学

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

九鬼周造著

増補新版

偶然と驚きの哲学

九鬼哲学入門文選

書肆心水

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

増補新版 偶然と驚きの哲学

目次

凡例と解題

九

偶然と運命	一五
偶然の諸相	二七
驚きの情と偶然性	四九
偶然性	八七
偶然化の論理	一一七
人間学とは何か	一三九
哲学私見	一五五
偶然と驚き	二〇一
『偶然性の問題』序・目次・序説・結論	二三三
九鬼周造略年譜／資料	三七
附録	一五

SAMPLE  
Shōshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

増補  
新版

偶然と驚きの哲学

九鬼哲学入門文選

SAMPLE  
[Shoshi-Shinsui.com](http://Shoshi-Shinsui.com)

# SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

「偶然性の問題」  
を著して

わくら葉のものの「はずみ」をかたくなに論理に問ひて一巻をなす  
偶然論ものしおりて妻にいふいのち死ぬとも悔ひ心なし  
一巻にわが半生はこもれども繙く人の幾たりあらむ

(『九鬼周造全集別巻』「短歌ノート」より)

## 凡例と解題

### 凡 例

一、本書は九鬼周造の諸著作より「偶然性」に関する文章を選んでまとめたものである。底本には岩波書店版九鬼周造全集を使用し、左記諸点以外の表記変更はしていない。

この増補新版で加えたのは、「偶然性」と「偶然化の論理」との二篇である。

一、底本は旧漢字・旧仮名遣いであるが、これは原則として新漢字標準字体・現代仮名遣いに置き換えた。但し、日本語の歴史的引用文（および語句）、詩歌における以下の三点、（一）仮名遣い、（二）漢字異体字（例、猿／猿、氷／冰）、（三）新漢字に対応する旧漢字の字義が区別される場合（例、弁／辨／辯／瓣）は底本のままとした。現在ではあまり使われない漢字用法も変更していない（例、決着／決著、周期／週期）。

一、底本の傍点はこの形であるが、本書ではこの形を使用した。

一、踊り字（くり返し記号）は現今も一般に使用される「々」以外は不使用とした（二）の字点は「々」に置き換えた。

一、（一）括りのルビと（一）括りの行内二行割注は本書刊行所が便宜的に補つたものである。（一）括りのない読み仮名ルビは底本にあるもので、なくともよいと感じられるものもすべて底本のままに採用した。

## 解題

九鬼周造の「偶然性」に関する著作は『偶然性の問題』が主著であるが、本格的哲学著作である『偶然性の問題』および九鬼哲学全般への入門篇として『偶然性』に関する諸篇を集めたのが本書である。「偶然性」の一篇以外は『偶然性の問題』刊行以後のものである。

附録として『偶然性の問題』の序・目次・序説・結論も収録した。なお、九鬼の「偶然性」に関する講義ノートや博士論文も全集版に収められているが、これらは入門的関心に適うものではないと考え、この文選には収録していない（本書巻末略年譜の末尾に参考資料として全集版の目次を掲載した）。

本書に収録した諸篇は、『人間と実存』（昭和十四年刊）、『をりにふれて』（昭和十六年刊）、『偶然性の問題』（昭和十年刊）の何れかに収められたものか、生前は公刊されなかつた手稿である。なお、「偶然と驚き」は「驚きの情と偶然性」の要約版のようなものなので附録扱いとした。また、収録各篇はそれぞれ独立した一篇として書かれ、論題を同じくするものであるため、話題が部分的に重複している場合があるが、いずれも中略することなく掲載した。

本書収録各篇と単行本収録の関係は次のとおり。

偶然と運命……『をりにふれて』  
偶然の諸相……『人間と実存』

驚きの情と偶然性……『人間と実存』

偶然性……手稿（講演原稿）

偶然化の論理……手稿

哲学私見……『人間と実存』

人間学とは何か……『人間と実存』

〈附録〉偶然と驚き……『をりにふれて』

〈附録〉『偶然性の問題』序・目次・序説・結論……『偶然性の問題』

『人間と実存』『をりにふれて』の収録内容は次のとおり。『偶然性の問題』（初版本、三三一ページ）の目次は本書附録（二一五ページ以下）に記載した。

- ・『人間と実存』（初版本、三二三ページ）。
- ・『人間と実存』（初版本、三三一ページ）。
- ・『人間と実存』（初版本、三三一ページ）。
- ・『人間と実存』（初版本、三三一ページ）。
- ・『人間と実存』（初版本、三三一ページ）。

人間学とは何か／実存哲学／人生観／哲学私見／偶然の諸相／驚きの情と偶然性／形而上学的時間／ハイデッガーの哲学／日本的性格

・『をりにふれて（遠里丹婦麗天）』（初版本、一四三ページ）。

内容と形式／藍碧の岸の思ひ出／東洋的時間／偶然と運命／時局の感想／書斎漫筆／自分の苗字／祇園の枝垂桜／飛驒の大杉／夢を語る／外来語所感／村上氏の批評に答ふ／一高時代の旧友／秋の味覚／青海波／故浜田総長の思出／偶然と驚き／回想のアンリ・ベルクソン／岩下壯一君の思出／（後語）

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

本書収録諸篇の初出などは次のとおり。

### ●偶然と運命

『をりにふれて』（昭和十六年刊）所収。全集版の解題には、「昭和十二年一月二十三日午後六時二十五分から三十分間行つたラジオ講演の原稿をそのまま活字化したものと思われる。なお、表題と本文との間の四行は当日の『東京朝日新聞』ラジオ欄に載つた著者の談話である。」と記されている。

### ●偶然の諸相

昭和十一年二月、『改造』に発表。『人間と実存』（昭和十四年刊）所収。

### ●驚きの情と偶然性

昭和十四年二月、『哲学研究』第二七五号に発表。『人間と実存』（昭和十四年刊）所収。

### ●偶然性

昭和四年十月二十七日に大谷大学で行なわれた講演の原稿。

### ●偶然化の論理

遺稿。（執筆時期不詳。但し、稿中に「偶然性の問題」（昭和十年）一五六頁」との補記がある。）

### ●哲学私見

昭和十一年六月、『理想』創立十周年記念号「我が哲学を語る」に発表。『人間と実存』（昭和十四年刊）所収。

### ●人間学とは何か

昭和十三年十月、『人間学講座』（理想社）[I 人間の哲学的考察]に発表。『人間と実存』（昭和十四年

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

刊) 所収。

### ●偶然と驚き

『をりにふれて』(昭和十六年刊)所収。全集版の解題には、「昭和十四年三月五日午後六時二十五分から三十分間行つたラジオ講演の原稿に見出しきつけ表現を変えた(例えば、お話をしようと→書いて見度いと)ものである」と記されている。

### ●偶然性の問題 序・目次・序説・結論

『偶然性の問題』(昭和十年刊)。全集版の解題には以下のような九鬼周造における「偶然性」の問題の位置についての指摘がある。やや長きにわたるが引用して紹介する。

「底本には昭和十(一九三五)年十二月十五日に岩波書店から刊行された初版の手沢本を用いた。この手沢本は各丁の間に白紙を一枚宛挟み込んだ特製本であり、その白紙の部分や本文に十六カ所の書き込みがなされている。本全集ではこれ等の書き込みを本文中に入れず、本文の後に一括して記載した。その理由は書き込みが必ずしも加筆訂正になつていなかつからである。おそらくこの特製本作製の目的が加筆訂正には無く、更に資料を加えて他日改訂せんと期したところに有つたのである。その一つの証左としてこの本に挟まれている偶然に関する七枚の新聞切抜き(いずれも昭和十一年三月三日付以後のもの)を挙げることができる。因に偶然に関する新聞切抜きで現在確認されている最も新しい日付は昭和十六年一月二十二日である。これに依つても著者が『偶然性の問題』刊行後も、如何に偶然に関心を払い続けていたかが了解される。従つてこの手沢本は加筆訂正のためのものではなく改訂のためのものであり、書き込みはその改訂への準備であつたと思われる。」

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
偶然と運命  
Shi-Shinsui.com

偶然という問題は日本では一昨年の言論界で流行したが、世界の思想史上では二千年以上も前からの問題で、一時の流行とは無関係である。有ることも無いこともできるもの、それがめったに無いものならばなお目立ってくるが、そういうものがヒヨツコリ現実面へ廻り合わせたのが偶然である。そうして人間の生存に至大な意味をもつてゐる偶然を特に運命と呼ぶのである。今日の講演では偶然の三つの性質を挙げて説明したあとで、運命の意味にも言及したいと考えている。

「偶然と運命」という題で、お話をいたすのですが、先ず偶然とはどういうものであるかということから先にお話をしようと思います。日本で新聞や雑誌で偶然ということがしきりに問題にされたのは今から云えども一昨年おととしであります。然し、この偶然という問題は決して一時の流行とか何とかいうような性質のものではないので、その証拠として、古くは印度では紀元前五世紀のマッカリ・ゴーサーラ(Makkhali Gosala)あたりが偶然を問題としていたのでありますし、支那では東漢の王充が問題としていましたし、ギリシアではアリストテレスが問題としていたのであります。昔から今に至るまで或は表に出たり或は裏にかくれたりして常に思索の対象となつてゐるのであります。一時だけ流行してあとはすたれてしまうというような問題ではないのであります。

それならば偶然とはどういうものであるかといいますのに、偶然ということには三つの性質が

SAMPLE  
Shishi-Shinsui.com

あるように思われるのです。第一に何か有ることも無いことができるようなものが偶然であります。第二に何かと何かとが遇うことが偶然であります。第三に何か稀れにしかないことが偶然であります。

先ず、第一の性質である、何か有ることも無いこともできる、ようなもの、ということから考へて見るならば、必ず有るという必然的なことでもなければ、決して無いという不可能なことでなく、有ることも無いこともできるというところが偶然にはなくてはならないのです。賽ころを墨壺の中へはめてどの面もすっかり真黒にしてしまつて、それを振つて黒い面が出てもそれは必然的なことで偶然ではないのです。またその場合、白い面が出るということは不可能なことであつて偶然起り得るようなことではないのです。こんどは墨壺へはめない普通の賽ころを振つて三なら三が出たとすれば我々はそれを偶然と考えるのであります。三が必ず出るという必然性もないし、三は決して出ないという不可能性もない。三が出ることも出ないこともあります。ともあり得る。出ることも出ないこともあり得るものが出たからそれが偶然なのであります。しかし賽ころの面は六つになつていますから、三が出るのは六分の一の確かさがあるわけであります。そういうと何か偶然さが減じたような感じがしますが別に減じてはいないのであります。六分の一の確かさがあるということは六回賽ころを振れば一回は三が出てもいい筈だというだけの

ことです。それは何百回、何千回と非常に多く振つて見た場合に全体の六分の一の割合で三が出るというだけのことであつて、振る回数が少なければ必ずしもその割合にはならない。六回振つて三が一度も出ないこともあるし、六回のうち三度位は同じ三が出ることもあるのは皆さんもよく御承知のことだと思います。確かに、すなわち確率という理論上の数量関係は実際には非常に多くの場合の総和に関して妥当するのであって、各々の場合にどの目が出るかということは全く偶然であります。尤もそれは或る意味では偶然でないと云えるであります。賽ころを振つたその場合場合に賽ころの現わす面は、賽ころそのものだの、それを受ける平面だの、投げ方だの、空気の抵抗だのの物理的性質によつて必然的に決定されたと考えなければならぬのであります。三なら三が出たとすればそれには三の面が出る原因が物理的に必ずなければならぬのです。従つてそれは偶然ではないと考えられる。然しそれでもなおもう一段高い立場に立つて考えて見れば、そこにはやはり依然として偶然があるのです。いま現に一定の因果系列に支配され必然的に三の面が出たとしても、その因果系列が必ず存在しなければならないという理由はどこにもないのであります。他の因果系列に支配されて五なら五の面が出ることもあり得たのであります。六つの各々違つた因果系列が論理的に同等の価値をもつて考えられるうちで或る一つの因果系列が現実として実現されたという点に依然として偶然があるのであります。

物理的必然の裏になお論理的または形而上の偶然が潜んでいるのであります。このことをはつきり認識することがかんじんであります。賽ころを振った場合に出る面が一でも二でも三でも四でも五でも六でもあり得るという可能性が論理的または形而上の偶然性を根拠づけるのであります。要するに何か有ることも無いこともできるようなものが偶然であります。「もののはずみ」ということを云いますが、あの「はずみ」というのはものがはずんだ拍子にこっちへ飛ぶかあっちへ飛びかかる知らない、この面が出るかあの面が出るかわからないという意味で偶然を表わしている言葉であります。また、有ることも無いこともできるというのは、必ずなければならぬという絶対的理由の欠けていることでありますから、従つて偶然とは理由が無くて生じたもの、原因が無くて生じたものというようを考えられる場合もあるのであります。「ゆくりなく」とか「端なくも」とかいうような言葉は「なく」という打消しによつて理由や原因の無いことが言い表わされているのであります。

今まで述べましたところではまだ少し曖昧なところがあつたのであります。有ることも無いこともできるというだけではまだ単に可能、という性質であります。偶然とことの成立に必要なものではありますが、それだけではまだ足りないのであります。偶然が成立するためには可能が可能のままで実現される、必然に移らないで可能のままで実現される、といった風のことがな

くてはならないのです。偶然の第二の性質として挙げて置いた何かと何かとが遇う、というのがそこで意味を有つてくれるのです。出逢つたというその瞬間に可能が実現されて偶然となるのです。ただその遇い方がかんじんです。遇い方を規定しているのがちょうど第一の性質であって、遇うことも遇わないこともあります。例えは病人の見舞に行くとしまして、その病人に遇うことは偶然ではない。わざわざ遇いに行つたのですから偶然ではない。然しそこへ見舞に来合わせた誰それに、思いがけず、遇うことは偶然であります。その人に遇うということには何等の必然性がないのです。なるほど、そこへ行けばその人に遇うこととも可能であつたには違いありませんが、遇わないことも可能であつたのです。遇つたとすればそれは偶然です。すなわち必ず遇うにきまつていなし、遇うことも遇わないこともできるような遇い方をするのが偶然であります。空を飛んでいる隕石が白熱の状態で地球へ落ちて来て、石油の発源地に火を起したとすればその隕石と石油との遇い方は偶然であります。『朝顔日記』に出てくる島田の宿しまだのしゆくで盲目の深雪みゆきが旅人の駒沢にめぐり合つたという遇い方も偶然であります。私が賽ころを振つて三が出たとすればその三の印と私の眼との出逢い方も偶然であります。遇わなければならぬという必然性が間へ入らないで可能が可能のままで出逢うのが偶然であります。

SAMPLE  
Sharing.com

偶然の「偶」の字は人偏であります、之縛しふくに書いた遇うという字と同じ意味であります、二つのものが遇うことを意味しているのであります。配偶の偶であります。我と汝とが出逢うといふことが偶然の根本的な意味であります。偶然に関係している言葉で「行当りばつたり」とか「廻り合せ」とか「仕合せ」とか「まぐれ当り」とかいうのはみんな何等か二つのものが合つて一つになるということを表わしているのであります。

これで偶然の第一と第二の性質のことを考えて見たのですが、もう一つ第三の性質として何か稀れにしかないことというのが残って居ります。この性質は第一の性質を更に限定しているので、偶然の偶然さを尖らかとがしていふとでもいいましようか、偶然の方向を示していふとでもいいましょうか、これによつて偶然が特に目立つて來るのであつて、偶然を認識する場合に重要な意味を有つて來る性質であります。例えば同じ工場につとめている者がその工場の建物のなかで、別段、遇うつもろもなく遇つたとすれば、それは偶然であります。然しそれはチョイチョイ起り勝ちなことであつて偶然にはちがいありませんが、いわば必然の方向を向いた偶然、従つてあまり目立たない偶然であります。それに反して二人が工場の所在地からずつと離れたどこかの町で思いがけずピッタリ遇つたとすれば、その場合には偶然ということが特に鋭く目立つてくるのであります。稀れにしか起り得ないことだからであります。稀れにしか起らぬこと、という

のは遇いにくいこと、という意味であります。賽ころを振つて三なら三が出るのもそれは偶然でありますから大きな偶然と考えられるのであります。三が六回も続けて互いに顔を合わせるということはめったにない偶然であります。偶然ということを表わすのに「わくらばに」という万葉あたりの古い言葉がありますが、わくら葉といふのは夏のうちに既に赤や黄色に色づいてうら枯れた木の葉のことであつて、そういうわくら葉はもちろん稀れにしかないものでありますから、偶然を表わすようになつたのであります。そのほか「たまたま」という言葉も偶然を意味していますが、これもやはり「稀れ」という意味を有つてゐます。「たまたま」というのは「たま」というのを二度繰返していますが「たま」とは何のことかといふのに「手の間」と書いて「たま」と読むのであって、「ま」というのが意味の中心をなしてゐるのであります。「ま」とは「間」あいだであつて空間的な隔りまたは時間的な隔りを指しているのであります。従つて「まれ」なものが理解されているのであります。「まれ」というのも「間有れ」がつまつたのであります。ともかくも「ま」というものは始終はない。じょしゅう稀れなものであるから「ま」が偶然ということを意味するようになつたのであります。「まがわるい」というのは現れた偶然の事態が自分にとつて適合性を欠いていることがあります。「こんなまになつた」というのはこういう偶然の事態に成り行つた

ことを意味しています。「ま」の音便で「まん」をつけて「まん」という場合がありますが、「まん」というのは偶然を表わしている著しい言葉であります。陶器を焼く人が、何か特別に面白い色合などが出来るのは窯の「まん」だなどということを言いますが、あの「まん」というのは、知らないうちに偶然に出来たものを云っているのであります。それで、いま挙げました幾つかの言葉が偶然ということを表わしていながら、「稀れにしかない」ということから来ているのでもわかるよう、偶然ということは稀な場合に特に浮き出て来て目にとまるのであります。稀な場合といふのは可能性の少ない場合であります。可能的ではあるけれども不可能に近いようなことが、どうかしたはずみで実現された場合に偶然が特に鋭く目立つて来て認識され易いのであります。偶然は必然の方へは背中を向け、不可能の方へ顔を向けていると云つてもいいのであります。

これで偶然の三つの性質を考えて見たのであります。一つにまとめて言いますならば、有ることも無いこともできるようなもの、それがめったに無いものならばなお目立つてくるわけであります。ですが、そういうものがヒヨックリ現実面へ廻り合わせると、それが偶然なのであります。

次に運命が何であるかということをお話いたします。運命ということは偶然ということさえわかつていればすぐにわかることがあります。偶然な事柄であつてそれが人間の生存にとって非常に大きい意味を有つてゐる場合には運命というのであります。そうして大きい意味というの

外面的なことにも内面的なことにもどちらでも考えられるのですが、人間にあって生存全体を振り動かすような力強いことは主として内面的なことでありますから、運命とは偶然の内面化されたものである、というようにも解釈されるのであります。運命と云えば例え崖下の道を歩いている時に崖が崩れて来て土に埋<sup>うずま</sup>つて死んだとすれば、それはその人の運命だったのです。但しこれはむしろ外見的な場合であります。また宇治の董狩で駒沢次郎左衛門に遇つたということは深雪<sup>みゆき</sup>とつては運命だったのです。その一つの出来事が深雪の一生を完全に支配してしま<sup>も</sup>う力を有つていたのです。ここでは運命の内面的な色合が濃く出てきています。其他、西郷隆盛<sup>ひろよし</sup>といふ一人の人間は江戸で生れることも京都で生れることも伊勢で生れることも土佐で生れることもできた筈<sup>はず</sup>であります。薩摩で生れたといふことは西郷隆盛の運命だつたのであります。私共はアメリカ人でもフランス人でもエチオピア人でも印度人でも支那人でもその他のどこの國の者でもあり得たと考へられるのであります。我々が日本人であるということは我々の運命であります。虫にも生れず鳥にも生れず獸<sup>けもの</sup>にも生れず人間に生れたということも我々の運命であります。人間に生れるという賽<sup>み</sup>ころの目がヒヨツコリ出たのであります。日本人に生れるという賽<sup>み</sup>ころの目がヒヨツコリ出たのであります。三つ口に生れついた者、せむしに生れついた者にとつてはそういう賽<sup>み</sup>の目が出たのであります。

SAMPLE  
Shishi-Sansui.com

ニイチエの『ツアラトウストラ』の中にこういう話があります。ツアラトウストラが或日、大きい橋を渡っていたところが、片輪だの乞食だのがとりまいて來た。その中にひとりせむしがいてツアラトウストラに向つて、だいぶ大勢の人があなたの教(わざわざ)を信じるようになつては來たが、まだ皆とは行かない。それには一つ大切なことがある。それは先ず私共のような片輪までも説きふせなくてはだめだと云つたのであります。それに対してツアラトウストラは「意志が救いを齎す」(みたらし)ということを教えたのであります。せむしに生れついたのは運命であるが意志がその運命から救い出すのであります。「せむしに生れることを自分は欲する」という形で「意志が引返して意志する」ということが自らを救う道であることを教えたのであります。このツアラトウストラの教(おしえ)は偶然なり運命なりにいわば活(かづ)を入れる秘訣であります。人間は自己の運命を愛して運命と一体にならなければいけない。それが人生の第一歩でなければならないと私は考えるのであります。皆さんには今ラジオを聞いておいでになる。放送局は幾つありますか幾つかの放送局があつて、それぞれ違った波長の電波を送つてはいるのであります。皆さんは受信機のダイアルを勝手にお廻しなつてそれらの色々と違った波長のうちでの波長でもお選びになることができたのであります。そうして自由に選択して一定の放送を聞いておいでになるのであります。運命というものは我々の側にそういう選択の自由がなくていやでも応でも無理に聞かされている放送のようなものであ

SAMPLE  
Shoshi-Shinsen.com

ります。ほかに違った放送が同じ時間に沢山あるのであるけれども、何故かこの放送を無理に聞かされているというわけであります。他のことでもあり得たと考えられるのに、このことがちょうど自分の運命になつているのであります。人間としてその時になし得ることは、意志が引返してそれを意志して、自分がそれを自由に選んだのと同じわけ合いにすることであります。山鹿素行も武士は命に安んずべきこと、すなわち運命に安んずべきことを教えていたのですが、安んずるというばかりでなく更に運命と一体になつて運命を深く愛することを学ぶべきであると思つのであります。自分の運命を心から愛することによつて、潑刺たる運命を自分のものとして新たに造り出して行くことさえもできるということを申して私の講演を終ります。

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
偶然の諸相  
[Soshi-Shinsui.com](http://Soshi-Shinsui.com)

—

偶然が有るとか無いとかいうことがかなり無造作に論議されるのを見受けることがある。いつたい偶然というのは何かと問うと、その答は多くの場合、明瞭を欠いている。偶然という言葉の内容する概念を漠然と考えて、そういうものが有るとか無いとかいって論議をする。論議の対象は厳密に云えば必ずしも一つではない。偶然という概念の下に甲は或るものを考え、乙は少しく違つたものを考え、丙は更にまたやや違つたものを考えている。人間について論議をする場合に、甲は直立した動物を考え、乙は笑う動物を考え、丙は理性的動物を考えているようなものである。概念が漠然としていては論議または論争が問題の解決に向つて共通の努力ができることができない。論議のための論議、論争のための論争に堕してしまう。偶然の有無を論議するためには、論議の対象である偶然の概念を先ず明かにした上で初めて、偶然が如何なる意味に於て有るか無いかとということを論議することができるるのである。

偶然という言葉が存在する以上は、偶然という概念の存在することは否むことはできない。問題は偶然の概念が現実に於て妥当性を有つてゐるかどうかということである。妥当性の問題は概念とその諸相を明かにするにつれておのずから解決されて行く。それゆえ我々は先ず偶然の概念

SAMPLE  
ShashinD.com

とその諸相を闡明することに力を注がなければならぬ。偶然の概念とその諸相とが明かになると共に如何なる領域に於て偶然が妥当性を有つかということが偶然の各種の形態に関しておのづから開明されて行くのである。

偶然という概念は何を意味しているか。偶然とは必然の否定であるということができる。これは盲目という概念を規定するのに、めあき目明の否定であるというようなものであるが、目明の方が我々にとって親しみのある概念であるから、目明の概念を基礎として盲目の概念を闡明することができるのである。それならば必然とはいつたいどういうことであるかといふに、同一といふ性質上の規定を様相の見地から言い表わしたものである。それ故に「甲は甲である」という同一律の形式が最も厳密な必然性を表わしている。与えられた自己が与えられたままの自己を保持して自己同一の形を取っている場合に、そういう同一者は他者であり得ないから、自己の在り方を必然的というのである。

同一性、従つて必然性はどういう様態を取つて現われてくるか。先ず「甲は甲である」というのが根本的な形態である。これは概念と徵表との間に存する定言性である。概念と徵表とが共に甲である点に同一性、従つて必然性が存している。然るに「甲は甲である」という命題は「甲ならば甲である」という命題へ展開する。第一の命題に於ける甲という概念が第二の命題では甲と

いう理由として立てられ、第一の命題に於ける甲という徵表が第二の命題では甲という帰結として立てられて来たのである。理由と帰結との間に存する仮説性が「ならば」という言葉で表わされている。そして理由と帰結とが共に甲である点に同一性および必然性が存している。更にまた「甲ならば甲である」という命題は「甲は甲であるか甲である」という命題へ展開する。なぜならば「甲ならば甲である」という命題は具体的には「甲ならば甲である」「甲ならば甲である」というような命題を含んでいる。そして「甲ならば甲であるか甲である」という命題は中核を簡単に言い表わせば「甲は甲であるか甲である」という命題に帰着するのである。これは全体と部分との関係に基いて各部分の間に存する離接性を表わしている。甲と甲とは甲という全体にあって離接的な部分を構成している。そして部分である甲と甲との和と、全体とが共に甲である点に同一性、従つて必然性が存している。以上三種の必然性の様態を定言的必然、仮説的必然、離接的必然と名づけることが出来る。(この三語と「定言的、仮説的、離接的」の三語との関係についての説明がある)

偶然とは必然の否定であるから、定言的必然の否定として定言的偶然があり、仮説的必然の否定として仮説的偶然があり、離接的必然の否定として離接的偶然がある。定言的偶然とは「甲は乙である」という場合に、乙という徵表が甲という概念に対して有つ関係である。仮説的偶然とは「甲ならば甲である」という場合に、この命題に対しても「乙ならば乙である」という命題が有つ

SAMPLE  
Showdown.com

関係、従つて甲と乙とが有つ関係である。離接的偶然は「甲は<sup>(も)</sup>甲であるか甲である」という場合に、甲または甲が乙として言い表わされる可能性に基いている。部分としての乙が全体としての甲に対して有つ<sup>(も)</sup>関係が離接的偶然である。必然性が同一者の同一性の様相的言表であつたに反して、偶然性とは一者に対する他者の二元性の様相的言表にほかならない。必然性は「我は我である」という主張に基いている。「我」に対して「汝」が指定されるところに偶然性があるのである。必然性に終始する者は予め無宇宙論へ到着することを覺悟していなければならない。それに反して偶然性を原理として容認する者は「我」と「汝」による社会性の構成によつて具体的現実の把握を可能にする地盤を踏みしめているのである。

## 二

定言的偶然は論理学上の概念的見地を出でないものである。茶柱が立つのはめでたいというような観念は定言的偶然に基礎を有つたものである。煎茶という概念は茶の葉を煮出して飲むものという内包との同一性に於て把握されている。斯ような概念の構成的内容に対して捨象された契機が概念の可能的内容をなす場合がある。煎茶は茶の葉を煮出して飲むものである。茶の葉はたとえ茶碗の中へ出て来てもやがては底へ沈んでしまう。その事実が本質的微表として煎茶の概念

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
附録2  
『偶然性の問題』抄  
[Shi-Shinsui.com](http://Shi-Shinsui.com)

序

偶然性という題目で私は昭和四年大谷大学秋期公開講演会で私見を述べた。昭和五年度の京都帝国大学の講義にも同じ題目を選んだ。それゆえ私はこの問題にはかなり前から関心(も)を有つていたのであるが、思索をこの一点に集注することは事情が許さなかつた。しかしこの問題は実存の中核に触れている問題であつて、いつかは何等かの究極的な形を取らなければ、私を休息させないものである。一先ずこの位の形で公けにして置こうと思う。

なお私はこの書の成立に同情と教示とを与えた先輩知友わけても朝永三十郎、田辺元の両博士に深い感謝の意を表して置きたい。

昭和十年八月

著者

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

目 次

序

説

- 一 偶然性と形而上学  
二 必然性の本質とその三様態  
三 偶然性の三様態

第一章

定言的偶然

- 一 概念と定言的偶然  
二 総合的判断の偶然性  
三 特称判断の偶然性  
四 孤立的事実としての偶然  
五 例外的偶然  
六 定言的偶然の存在理由  
七 定言的偶然から仮説的偶然へ

第二章  
理由的偶然  
仮説的偶然

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

一九	一八	一七	一六	一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	
歴史と偶然	偶然性と時間空間的限定	同時的偶然と継起的偶然	周易と偶然	仮説的積極的偶然の一般性格	複合的偶然	因果的積極的偶然	因果的消極的偶然	目的的偶然から因果的偶然へ	アウトマトンとテュケ	故意と偶然	目的なき目的	目的的積極的偶然	目的的消極的偶然	理由的積極的偶然	因果的偶然と目的的偶然	理由的消極的偶然	因果性と目的性	

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

第三章

離接的偶然

偶然の客觀性

二〇

仮説的偶然から離接的偶然へ

- |     |      |       |       |           |          |              |                |               |            |        |          |       |
|-----|------|-------|-------|-----------|----------|--------------|----------------|---------------|------------|--------|----------|-------|
| 一四  | 一三   | 一二    | 一〇    | 九         | 八        | 七            | 六              | 五             | 四          | 三      | 二        | 一     |
| 有と無 | 形而上の | 偶然と運命 | 偶然と芸術 | 偶然性と驚異の情緒 | 偶然性の時間性格 | 偶然の遊戯と蓋然性の概念 | 偶然性と不可能性との類似關係 | 偶然性と可能性との類似關係 | 偶然相性の二つの体系 | 偶然相性一般 | 離接的偶然の意味 | 離接的偶然 |

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

結

二 一 論

偶然性の核心的意味  
偶然性の内面化

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 序　説

### 一 偶然性と形而上学

偶然性とは必然性の否定である。必然とは必ず然か有ることを意味している。すなわち、存在が何等かの意味で自己のうちに根拠を有つてゐることである。偶然とは偶々然か有るの意で、存在が自己のうちに十分の根拠を有つていないことである。すなわち、否定を含んだ存在、無いことの出来る存在である。換言すれば、偶然性とは存在にあって非存在との不離の内的関係が目撃されているときに成立するものである。有と無との接触面に介在する極限的存在である。有が無に根ざしている状態、無が有を侵している形象である。

偶然性にあつて、存在は無に直面している。然るに、存在を超えて無に行くことが、形を越えて形而上のものに行くことが、形而上学の核心的意味である。形而上学は「「真の存在」」を問題としているに相違ない。しかし「「真の存在」」は「「非存在」」との関係に於てのみ原本的に問題を形成

するのである。形而上学の問題とする存在は、非存在すなわち無に包まれた存在である。そうして形而上学すなわち勝義における哲学と他の学問との相違もまさにこの点に存している。他の学問は存在もしくは有の断片を、与えられた存在および有の断片として問題とするだけで、無に就ては、また有と無との関係に就ては、何のをも知ろうとしない。

偶然性の問題は、無に対する問と離すことが出来ないという意味で、厳密に形而上学の問題である。また従つて、形而上学としての哲学以外の学問は偶然性ということを本来の意味に於て問題としない。数学に所属する確率論が偶然性を自己の問題としていると考えられるかも知れない。確率論は偶然の場合を取扱つてゐるに相違ない。しかし確率論の意図は偶然を偶然として偶然性に於て擱もうとするのではない。偶然性の意味それ自身をそれ自身において闡明しようとするのではない。確率論の关心は、「事象の生起および不生起の総ての可能的な場合と、その事象の生起する偶然的な場合との間に存する数量的関係」ということに尽きて いる。しかも理論上の数量的関係は、経験上には観測の回数を無限に大にした場合に初めて妥当性をもち得るのであるから、確率論は偶然的事象の生起する数量的関係の理念的恒常性を巨視的に規定しようとするに過ぎない。微視的なる細目に存する偶然的可変性は少しも触れられない。しかも偶然の偶然たる所以はまさに細目の動きに存している。要するに、確率論とは偶然そのものの考究ではない。「偶

然」の「計算」とさえも云えない。偶然そのものは計算は出来ない。確率論が一定の視角に於て偶然性へ斜視を投げることによつてその構造を或度まで目撃させることは否むことはできないが、偶然性の全貌に関して何等の把握を許すものではない。量子力学的理論が偶然性を問題とすると考へる者があるかも知れない。しかし量子力学の理論は量子力学的現象として位置と速度との両条件を同時に決定し得ないことを断定し、従つて或度の偶然性の支配を許容するだけのことである。その謂わゆる不確定性原理は偶然性を単に原理として承認しているに過ぎない。量子力学的偶然は量子力学そのものにとつて飽くまでも「不可知な次元」に属するものである。自己の原理に関する反省を存在の全面に亘つて原理的ななすことを、量子力学的理論に求めるることは出来ない。偶然性は科学の原理的与件となることは出来ても、まさにその偶然性そのものによつて、科学には対象として取り扱えないという根源的性格を有つたものである。偶然を偶然としてそのままの面目において問題となし得るものは形而上学としての哲学を描いてほかにはない。

しかしながら、またすべての学問は、事物の必然的乃至蓋然的関係を究明しようとする理由そのものによつて、原理的には偶然性の問題と離れることが出来ない。すべての学問は、自己の勞作に関して原理的反省をする場合には必ず、但しその時に初めて、偶然性の問題に本来の面目に於て当面するのである。それはほかでもない。一切の学問はその根柢に於て形而上学に連つてい

るからである。要するに、偶然性の問題は、無に關するものである限り、すなわち無の地平において十全に把握されるものである限り、厳密に形而上学の問題である。もとより、この問題は完全に解決し得られる問題であるか否か、それはおのずからまた別問題である。ただ我々は偶然性ということを哲学の問題として飽くまでも追求して見なければならぬ。シェストフの言葉を借りて云えば、我々は「この世界の中に何等か統計学と「必然性」以外のものを發見しよう」という希望を棄てることを欲しない人たち」に属する (L. Chestov, La Philosophie de la Tragédie, Paris, 1926, Préface, p. XV) のである。そうして偶然性の存在論的構造と形而上の理由とを出来得る限り開明に齋すことを願うものである。

## 二 必然性の本質とその三様態

偶然性が必然性の否定である限り、偶然性の意味を把握するためには、先ず必然性の意味を闡明することから出発しなければならない。然らば必然性とは何ぞというに、既に云つたように、必ず然か有ること、すなわち反対の不可能なることを意味している。反対が不可能なりとは、自己のうちに存在の理由を有し、与えられた自己が与えられたままの自己を保持することである。そうして、自己が飽くまでも自己を保持する場合には、自己保存または自己同一の形を取つて来

る。すなわち必然性の概念は同一性を予想している。従つて「甲は甲である」という同一律の形式が最も厳密なる必然性を表わしている。必然とは、畢竟、同一という性質上の規定を様相の見地から言表したものにほかならない。トレンドレンブルクも云つてはいる。「必然的なものは、その概念上、不变のものであつて、従つて既にアリストテレスでは *άιδιον*（永遠）と呼ばれ、スピノザでは *aeternum*（永遠）と呼ばれているが、必然的なものの中には同一的なものが現われている。すべての必然的なものは自己同一であつて、斯かるものとして自己を固守するものである」(Trendelenburg, Logische Untersuchungen, II, 3. Aufl., S. 210)。「同一性の後には必然性が背中合せに立つてゐる」(ibid., S. 175)。 Hegel も「必然性とはそれ自身に於ては、一つの自己同一的な、但し内容の充実した本質である」と云い、また「必然的なものはそれ自身の中で絶対的関係である。すなわち、関係が自身をもまた絶対的同一性へ止揚するところの、展開された過程である」(Hegel, Encyklopädie hrsg. v. Bolland, 1906, §§ 149, 150)と云つてはいる。

同一、従つて必然という規定は(一)概念性、(二)理由性、(三)全体性において認められる。すなわち(一)概念と徵表との関係、(二)理由と帰結との関係、(三)全体と部分との関係に関して把握されるものである。ロツツェは甲と乙との相互間の関係に於て必然的認識へ導く形式が三つあるとしている。(一)普遍的判断(二六頁参照)を造つて、類概念甲の中にそれ自身既に思惟されてい

るような乙を求める。そうすれば、この乙は必然的に甲の各々の種に帰属する。(二)仮説的判断を造つて、 $x$ という条件が甲に加わることによつて、この条件なしには存在しないであろうところの乙が、その甲に生ずることを示す。そうすれば、同様の条件が同様の仕方で作用を及ぼすところの各々の甲に関して、(一)の乙は必然的に妥当する。(三)離接的判断を造つて、或る問題を厳密な「一か他か」へ還元するならば、それと同時に事態を確實に握るようになる。そうすればもはや一つの経験を要するだけで、各々の個々の場合に於て、乙か丙か二つの述語のうちのいづれが甲に関する必然性を有つて指定されるかを決定することが出来る。必然的認識へ到達する道は以上の三種に限られたもので、他の道といふものは無い (Loize, Logik, hrsg. v. Misch, Leipzig, 1912, S. 65)。

ヘーゲルも必然性を具現する絶対的関係として (一) 実体性と属性との関係、(二) 因果性の関係、(三) 交互作用の関係の三つを挙げている。そして実体が必然性の概念を充実するためには実体が原因として、属性が結果として把握されなければならぬ、すなわち実体属性の関係が因果関係へ移り行かなければならぬとしている。また、因果系列が真に無限であるためには因果系列は直線の形を取らずに円形を取らねばならぬ、すなわち因果性は交互作用にならねばならぬと云つて、三種の必然性の内的関聯を説いている (Hegel, Encyklopädie, hrsg. v. Bolland, 1906, §§ 150-156)。

我々は必然性のこの三つの様態を (一) 定言的必然、(二) 仮説的必然、(三) 離接的必然と名付けて置

こう。いつたい、判断の関係上の区別は、定言的、仮言的、選言的の語を以て表わされることが寧ろ普通であるが、我々は特に、定言的、仮説的、離接的の語を用いようと思う。

### 三 偶然性の三様態

偶然性は必然性に対立した意味であるから、必然性の三様態に対して偶然性の三様態が存する筈である。(一) 定言的偶然、(二) 仮説的偶然、(三) 離接的偶然の三つがなければならぬ。偶然性を斯ように三つの様態に区別することによって初めて偶然性の意味が雑多と統一とに於て明かになると思う。偶然に関する理論が常に明晰を欠くのは、問題そのものの困難にもよつているのは勿論であるが、問題提出の出発点に於て、偶然性の様態の区分がなんら原理に基いて明晰に行われず、その統一的把握が主題として明かに意識されないことに基くところが多いと思う。

事実としてこの三様態の区分に相当するものはアリストテレスに見ることが出来る。後に詳論するところであるが、アリストテレスのいう「シユムベベコス」(*συμβεβηκός*, *accidens*) は定言的偶然に當り、「アウトマトン」(*αὐτόματον*, *cassis*) と「テュケ」(*τύχη*, *fortuna*) とは仮説的偶然に當り、「エンデコメノン」(*ἐνδέκομενον*, *contingens*) は離接的偶然に當つてゐる。なおミローは「アリストテレスおよびクールノーに於ける偶然」という論文のなかでアリストテレスの偶然論とクールノー

の偶然論にあって共通なる偶然の三方面を指摘している。第一は「遭遇」(rencontre)である。第二は「稀有」(rareté)である。第三は「一つの可能」(un possible)である (Gaston Milhaud, Études sur la Pensée Scientifique, 1906, pp. 137-158; Revue de Métaphysique et de Morale, 1902, pp. 667-681)。然るに「遭遇」とは一つの理由系列と他の理由系列との遭遇を意味しているから、仮説的偶然にはかならない。また「稀有」とは稀れにしか所属せぬ意味であるから、概念と徴表との間に存する定言的偶然でなければならぬ。また「一つの可能」とは同等に可能なる幾つかの離接肢の中に於ける一つの可能を意味しているから、離接的偶然にはかならない。リッケルトも偶然の三つの意味を挙げている。(一)法則的でないもの、(二)原因を有たぬもの、(三)本質的でないものがそれである (H. Rickert, Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung, 3. Aufl., 1921, S. 286-287)。法則的でないものの例としては、地球でなくて土星が環を有っていること、フレデリック大王がロイテンの戦闘に勝利を占めたこと等を挙げているから、法則の普遍的包摂性に対して離接的偶然の離接的孤在性を指しているのである。原因を有たぬものは、因果性の外にあるものとして仮説的偶然である。本質的でないものとは、概念の本質に所属せるものとして定言的偶然である。偶然性を定言的、仮説的、離接的の三つに分けることが事態に即したものであることは、これらの範例に照してもほぼ明かであると信ずる。

なお後に示すように、定言的偶然は論理学上の概念的見地に終始し、仮説的偶然は経験界における因果性に関して顕著に現われ、離接的偶然は形而上の絶対者に対して特に浮き出てくるものであるから、優勢的命名法によつて三者を論理的偶然、経験的偶然、形而上的偶然と呼ぶのも一つの仕方である。しかし偶然性はその根源において論理学的様相性に所属するものであるから、この種の優勢的命名法は厳密に云えば不適切であることを免れない。以下、偶然性の問題を、定言的偶然、仮説的偶然、離接的偶然の三項に分けて考察しよう。

## 結論

### 一 偶然性の核心的意味

以上において定言的、仮説的、離接的の三地平にあって偶然性の闡明を計った。定言的偶然は、定言的判断において、概念としての主語に対して述語が非本質的徵表を意味するときに成立した。すなわち、或る言明的判断が主語と述語との同一性を欠くために確証性、従つて必然性をもたないことが明かになつた場合である。仮説的偶然は、仮説的判断の理由帰結の関係以外に立つものとして成立した。すなわち、理由と帰結との同一性によつて規定せられたる確証性、従つて必然性の範囲外にあるものとして成立した。離接的偶然は、与えられた定言的判断もしくは仮説的判断を、離接的判断の一区分肢と見て、他にもなお幾つかの区分肢が存すると考へることによつて成立すると云える。すなわち、言明的または確証的の命題を離接関係に立つ区分肢と見ることによつて、被区分概念の同一性に対し差別性を力説すると共に、言明性（現実性）および確

証性（必然性）を問題性に問題化するのである。

定言的偶然は定言的構造にあって非本質的徵表すなむち偶然的徵表が概念の同一性に対しても示す偶然性であった。そして概念の必然的徵表と偶然的徵表との関係は、分析的判断と綜合的判断の差別に於て、分析的判断の基礎をなす同一性と綜合的判断の根柢に潜む偶然性とに見られた。また全称判断と特称判断との差別に於ても、必然性は全称判断によって言表され、偶然性は特称判断によつて陳述されることを知つた。次で定言的偶然が、孤立的事実として、更に例外として現われることを考察した。概念の本質的徵表が法則の価値を有つとき、法則に対する例外の意味より有たない偶然的徵表の偶然性が例外的偶然として特に偶然性を強調しているのである。

然らば定言的偶然の核心的意味は何にあるか。例外的偶然が定言的偶然の中で特に顯著なる偶然性を有していることによつても察知せられる如く、定言的偶然の核心的意味は畢竟、一般概念に対する「個物および個々の事象」ということに帰した。

次に仮説的偶然は理由性の仮説的構造の有つ同一必然性に對して、斯かる構造の圈外にあるものが示す偶然性であった。純論理的範囲に於ては理由的偶然として現われ、経験界にあつては理由的偶然の適用の形で目的的偶然および因果的偶然として現われた。仮説的偶然のこの三様態は更に各々消極的偶然と積極的偶然とに分れた。消極的偶然は一つの事象に関して理由性、因果性、

目的性の非存在が消極的に目撃される場合であり、積極的偶然は二つまたは二つ以上の事象間に理由性、因果性、目的性の仮説的必然的関係の非存在を見るのみならず更に進んで積極的に他の何等かの関係の存在を目撃する場合である。積極的偶然はその積極性によって消極的偶然よりも頗著な偶然性を示している。のみならず消極的偶然の根柢にはまた必ず何等かの積極的偶然が存してゐるものである。積極的偶然は相対的偶然の性格を有つ限り「一の系列と他の系列との邂逅」<sup>(も)</sup>という構造を示す。そうしてこの構造がまた實に仮説的偶然の核心的意味であつた。なお目的的偶然と因果的偶然とは経験界に属するものとして経験的偶然と呼ぶことが出来たが、経験的であることに基いて時間的契機を有つてゐる。経験的積極的偶然は時間内において邂逅するものである。それは同時的偶然と繼起的偶然との二つがあるが、後者は前者に還元せられるのである。そうして同時性が空間性と関係している限り、経験界に於ける偶然の核心的意味は「この場所での、この瞬間での邂逅」という歴史的非合理性の形を取つて来なければならない。

最後に離接的偶然は離接的構造にあって、可能的離接肢の全体の有つ同一性に対して、各々の可能的離接肢が示す偶然性であった。偶然性と可能性との関係を知るに至つて、諸様相の構成する体系内にあつて偶然性の占める位置、特に偶然性が可能性に対してもつ特殊の関係を闡明する必要を生じた。可能性の極小が偶然性の極大である。有ることの可能性が小さいことは無いこと

の可能性の大きいことを意味している。離接的偶然の核心的意味は「無いことの可能」として「無いことの必然」へ近迫することであった。偶然性は不可能性の無の性格を帶びた現実である。單なる現実として戯れの如く現在の瞬間に現象する。現在の「今」現象した離接肢の現実性の背景に無を目撲して驚異するのが偶然である。そうして驚異の情緒は実存にとって運命を通告する。なお可能な離接肢の全体は勝義において形而上の絶対者を意味し、形而上の絶対者はその具体性において「必然—偶然者」として闡明される。また絶対者と有限者とを繋ぐものが運命である限り、運命もまた「必然—偶然者」の性格を担つて実存の中核を震撼するのである。必然偶然の相関が有と無との相関に基くことを会得することが、偶然性に関する知見の根柢をなさなければならぬ。

要するに定言的偶然の核心的意味は「個物および個々の事象」ということであった。仮説的偶然の核心的意味は「一の系列と他の系列との邂逅」ということであった。離接的偶然の核心的意味は「無いことの可能」ということであった。個物および個々の事象であるが故に、一般概念に対して偶然的徵表を備えていたのである。独立した系列と系列との邂逅であるが故に、理由と帰結の必然的関係の外にあつたのである。無いことの可能なるが故に、諸可能性全体の有つ必然性に悖つたのである。そうして、これらの偶然の三つの意味は決して個々に分離しているのではない。

く、渾然として一に融合している。「個物および個々の事象」の核心的意味は「一の系列と他の系列との邂逅」ということに存し、邂逅の核心的意味は邂逅しないことでも可能であること、すなわち「無いことの可能」ということに存している。そうしてこれらすべてを原本的に規定している偶然性の根源的意味は、一者としての必然性に対する他者の措定ということである。必然性とは同一性すなわち一者の様相にほかならない。偶然性は一者と他者の二元性のあるところに初めて存するのである。アリストテレスが偶然とは「自己としてではなく、他のものとして」(οὐδὲν αὐτὸν ὁλότερον) 存在する (Aristoteles, *Metaphysica*, Δ. 30, 1025<sup>a</sup>) といふ、ヘーゲルが偶然的なものは一般にその存在の根拠を「自己自身の中にではなくて他者の中」(nicht in sich selbst, sondern in Anderem)<sup>(注)</sup> 有つて いる如きものである (Hegel, *Encyklopädie*, hrsg. v. Bolland, 1906, § 145, *Zusatz*, S. 193) といひてい るのも全くそのためである。個物の起源は一者に対する他者の二元的措定に遡る。邂逅は独立なる二元の邂逅にほかならない。無いことの可能是一または他の選択に基くものとして二元を予想している。有の意味を同一律によつて規定し、同一律に反するものを無と看做したエレア派の哲学は、偶然に対する驚異に発して他者の二元的措定に対する悲劇的拒否に終つた。しかも我々はエレア派の哲学に一面の真理を承認しない訳にゆかない。そこにまた人間の悩みと喜びとが潜んで いるのである。

## 二 偶然性の内面化

偶然性の問題は、無の問を含むが故に、厳密に形而上学の問題であると云つた。また形而上学としての哲学以外の学問は無の問を除外するが故に、偶然性を問題としないことも云つた。偶然性は「この場所」「この瞬間」における独立なる二元の邂逅として尖端の危きに立つて辺際なき無に臨むものである。偶然性は普遍的思惟を範として法則の必然乃至は蓋然をのみ追求する学問にとっては一顧の価なき非合理と考えられるかも知れない。アリストテレスも偶然の「背理」(*παράδοξος*) (Aristoteles, *Physica*, II. 5, 197<sup>a</sup>)について語つた。偶然性は学的認識に対しても限界を形成している。

然しながら、この限界は理論的実存性に対して端初の意義を有つことを知らなくてはならない。<sup>(4)</sup>

経験的認識は認識の限界たる偶然性から出発し常にこの限界に制約されたものでなければならぬ。経験に齊合と統一とを与える理論的体系の根源的意味は他者の偶然性を把えてその具体性において一者の同一性へ同化し内面化することに存している。眞の判断は偶然—必然の相関に於て事実の偶然性に立脚して偶然の内面化を課題とするものでなければならぬ。思惟の根本原理たる同一律は内面化の原理にはかならない。「甲は甲である」というのは「我は我である」ということ

にほかならない。判断の本質的意味は邂逅する「汝」を「我」に深化することでなければならぬ。我の内的同一性へ外的なる汝を具体的に同一化するのが判断の理念である。しかしそれはエレア的抽象的普遍性に於ける空虚なる同一性を目指すのであってはならない。同一律による内面化は事実として邂逅する汝の偶然性に制約された具体的内面化でなくてはならない。そこに学問の部門的独立と学的体系の段階組織との基礎が存している。またそこに一部門内の学的労作の具体性、現実性の保証も存している。单なる同一化、单なる必然化は一切の汝、一切の偶然性を否定することによつて無宇宙論へ導く。理論的認識の到達すべき理想は单なる必然性であつてはならない。偶然を満喫し偶然性に飽和された「偶然—必然者」でなければならない。

いつたい、偶然性の時間性格が直態としての現在である限り、必然的思惟の方法論的体系としての論理学に対して偶然性が非合理性として現われるのは異とするに足りない。しかしながら、論理的規定を「汝」の直接性に即して出発させ、「汝」の内面化に学的労作の理念を捉えることは論理そのものに生命を齎らし、学問に具体的価値を賦与する所以である。「我＝我」なる思惟の同一性の領域と、「我」による「汝」の体験の直接性とを、出来得る限り緊密の関係に保ち、必然と偶然とを不可分離の相間に於て接觸せしめることは、生の論理学へ邁進する理論的実存にとつて公理的要求でなければならない。

抽象的普遍性に誤られた学問にとって偶然性が意味を有たぬと同様に、範を科学に取る合理的形式的倫理説にとつても偶然を容れる場所はないであろう。道徳法をして例外を許さざる普遍的自然法の如くにあらしめようとする倫理説は抽象的同一性を追うことによつて「何ものをも意志しない意志」に到達して実践上の無宇宙論に陥るであろう。道徳の内容は現在の呈供する偶然性によつて個別化されたものでなければならない。道徳の課題とする実践的普遍性は抽象的普遍性であつてはならない。偶然を契機として全体を内包的に限定する具体的普遍でなければならぬ。もしすべてを形式的同一性に单一化しようとする倫理説があるとしたならば、その抽象的普遍性に反抗して、死に臨んで偽ったデスデモナのように偽ろう、ティモレオンのように人を殺そう、オットーのように自殺をしよう、ダビデのように神殿に入つて盜もう、飢えたるが故に安息日に麦の穂を摘もう (Jacobi, Werke, III. 1816, S. 37) と云う者があつても、その声は人間の内奥に叫ぶ良心の声として聽かれるであろう。偶然性の実践的内面化は具体的全体に於ける無数の部分と部分との間柄の自覚にほかならない。孤在する一者はかしこにここに計らずも他者と邂逅する刹那、外なる汝を我の深みに内面化することに全実存の悩みと喜びとを繋ぐものでなければならない。我の深みへ落ち込むよう偶然をして偶々邂逅せしめるのでなければならない。ハイデッガーも「偶然と呼ばれるものは共同的環境的世界から、決意性へ向つてのみ偶然することが出来

る」と云つていぬ (Heidegger, *Sein und Zeit*, S. 300)。ヤスパースも「把え得べき如何なる思想をも超えて、余は限界状況に於て驚愕を経験し、斯くて我がものとして擱んだ偶然と一体なることを経験する」と云つてゐる (Jaspers, *Philosophie*, II, S. 217)。「説卦伝」に「觀・變於陰陽・而立・卦、發・揮於剛柔・而生・爻、和・順於道德・而理・於義、窮・理尽・性以至・於命・」と云つてゐるのも偶然性の実践的内面化を説いてゐるにほかならない。偶然を成立せしめる二元的相対性は到るところに間主体性を開示することによつて根源的社會性を構成する。間主体的社會性に於ける汝を実存する我的具体的同一性へ同化し内面化するところに、理論に於ける判断の意味もあつたように、実践に於ける行為の意味も存するのでなければならぬ。道徳が単に架空なものでなく、力として現実に妥当するためには、与えられた偶然を跳躍板として内面性へ向つて高踏するものでなくてはならぬ。偶然に対する驚異は單に現在にのみ基礎づけられねばならぬことはない。我々は偶然性の驚異を未来によつて倒逆的に基礎づけることが出来る。偶然性は不可能性が可能性へ接する切点である。偶然性の中に極微の可能性を把握し、未来的なる可能性をはぐくむことによつて行為の曲線を展開し、翻つて現在的なる偶然性の生産的意味を倒逆的に理解することが出来る。「目的なき目的」を未来の生産に醸して邂逅の「瞬間」に驚異を齎らすこと出来る。そうして、一切の偶然性の驚異を未来によつて強調することは「偶然—必然」の相関を成立させることであつて、

また従つて偶然性をして真に偶然性たらしめることである。これが有限なる実存者に与えられた課題であり、同時にまた、実存する有限者の救いでなければならぬ。『淨土論』に「觀・仏本願力、遇無・空過者」とあるのも畢竟このことであろう。「遇う」のは現在に於て我に邂逅する汝の偶然性である。「空しく過ぐるもの無し」とは汝に制約されながら汝の内面化に関して有つ我が未来の可能性としてのみ意味を有つてゐる。不可能に近い極微の可能性が偶然性に於て現実となり、偶然性として堅く摑まれることによつて新しい可能性を生み、更に可能性が偶然性へ發展するところに運命としての仏の本願もあれば人間の救いもある。無をうちに藏して滅亡の運命を有する偶然性に永遠の運命の意味を付与するには、未来によつて瞬間を生かしむるよりほかはない。未来的なる可能性によつて現在的なる偶然性の意味を奔騰させるよりほかはない。かの弥蘭の「何故」に対して、理論の圈内にあっては、偶然性は具体的存在の不可欠条件であると答えるまでであるが、実践の領域にあっては、「遇うて空しく過ぐる勿れ」という命令を自己に与えることによつて理論の空隙を満たすことができるであろう。

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
附錄3  
九鬼周造略年譜／資料  
OSHII-Shinsui.com

この年表は、およそ『九鬼周造全集別巻』収録の「九鬼周造年譜」より主だった事項を抽出して作成した。著作事項は、著名なもの、単行本、本書に関わるもののみを記載した。九鬼周造のまとまつた年譜は、全集別巻収録のもののほか、九鬼周造の死後ほどなく刊行された『をりにふれて』の天野貞祐著「後語」末尾に付されている澤瀉久敬作成のものがある（ほぼそれに拠つたものが燈影舎版『偶然性の問題・文芸論』に「九鬼周造略年譜」として収められている）。

一八八八（明治二十一）年

二月十五日、九鬼隆一の四男（燈影舎版四男）として東京市芝区芝公園十四号十九番地に生まれる。父は駐

米特命全権公使、貴族院議員、枢密顧問官等を歴任、明治二十九年、男爵（周造誕生時は駐米公使）。

一八九四（明治二十七）年 六歳

東京高等師範学校附属小学校入学。

一九〇〇（明治三十三）年 十二歳

東京高等師範学校附属中学校入学。

一九〇五（明治三十八）年 十七歳

第一高等学校獨法科入学。

一九〇六（明治三十九）年 十八歳

第一高等学校文科に転科。

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

一九〇九（明治四十二）年 二十一歳

第一高等学校文科卒業、東京帝国大学文科大学哲学科入学、ケーベルに師事。

一九一一（明治四十四）年 二十三歳

洗礼を受ける。

一九一二（明治四十五・大正一）年 二十四歳

東京帝国大学卒業、同大学院入学。成績優秀により特選給費生。

一九一八（大正七）年 三十歳

前年死去の次兄未亡人九鬼縫子と結婚。

一九二一（大正十）年 三十三歳

東京帝国大学大学院退学、文部省嘱託となる。ヨーロッパ留学に妻と共に出発。

一九二二（大正十二）年 三十四歳

ハイデルベルク大学在籍。リッケルトに学ぶ。

一九二四（大正一三）年 三十六歳

前年末より滞在していたチューリッヒからパリに移る。

一九二五（大正十四）年 三十七歳

パリ大学文学部在籍。この年から翌々年にかけて短歌、詩篇をいくつか『明星』に発表（匿名）。

一九二六（大正十五・昭和一）年 三十八歳

「いき」の本質を書き上げる。（サルトルが九鬼の家庭教師をしたのはこの頃とされている）。

SAMPLE  
Shoshi-Shinsai.com

一九二七（昭和二）年 三十九歳

フライブルク大学に移りフッサーールに学ぶ。フッサーール宅でハイデッガーに会う。マールブルク大学在籍、ハイデッガーの冬学期講義、ゼミナール出席。

一九二八（昭和三）年 四十歳

ハイデッガーの夏学期講義、ゼミナール出席。この時期、夫人同伴でハイデッガー宅を訪問し、「いき」について語り合ったことがハイデッガーの著書に記されている（“Unterwegs zur Sprache”）。パリに戻る。ポンティニーにおいて講演（“La notion du temps et la reprise sur le temps en Orient” および “L'expression de l'infini dans l'art japonais”）。“Propos sur le temps”をパリの Philippe Renouard 社より刊行。パリのグルクソン宅、二度目の訪問。ヨーロッパ留学を終え、アメリカ経由で帰途につく。

一九二九（昭和四）年 四十一歳

帰国。京都帝国大学文学部哲学科講師就任。大谷大学で「偶然性」と題する講演。

一九三〇（昭和五）年 四十二歳

「「いき」の構造」を『思想』に発表。『「いき」の構造』を岩波書店より刊行。

一九三一（昭和六）年 四十三歳

父隆一死去（七十九歳）。母波津死去（七十一歳）。

一九三三（昭和七）年 四十四歳

京都帝国大学に提出した学位論文「偶然性」により文学博士となる。

一九三三（昭和八）年 四十五歳

SAMPLE  
Shishi-Shinsui.com

京都帝国大学助教授となる。

一九三五（昭和十）年 四十七歳

京都帝国大学教授となる。『偶然性の問題』を岩波書店より刊行。

一九三六（昭和十二）年 四十八歳

「偶然の諸相」を『改造』に発表。『哲学私見』を『理想』に発表。九鬼の尽力により、ナチスに迫害されドイツを追われたカール・レーヴィットが東北帝国大学哲学科講師に着任。

一九三七（昭和十二）年 四十九歳

ラジオ講演「偶然と運命」（三十分）。

一九三八（昭和十三）年 五十歳

「人間学とは何か」を『人間学講座』（理想社）に発表。京都哲学会公開講演会で「驚きの情と偶然性」と題して講演。

一九三九（昭和十四）年 五十一歳

「驚きの情と偶然性」を『哲学研究』に発表。ラジオ講演「偶然と驚き」（三十分）。満洲国、中華民国視察。『人間と実存』を岩波書店より刊行。

一九四一（昭和十六）年 五十三歳

「回想のアンリ・ベルクソン」を『理想』に発表。四月十日、腹膜炎と診断され京都府立医科大学附属病院に入院。五月六日、午後一時五十分逝去。戒名「文恭院徹誉周達明心居士」（京大同僚小島祐馬創意）。法然院境内の墓に葬られる。昭和二十年完成の墓碑には西田幾多郎の筆により、「九鬼周造之

SAMPLE  
Shishi-Shinsui.com

墓」の文字と「ゲーテの歌」が記された。

\*

死後その年内の出版物に、『文芸論』（九月、岩波書店）、遺稿集『をりにふれて（遠里丹婦麗天）』（十月、岩波書店）がある。『をりにふれて』の天野貞祐著『後語』には、「文芸論」は著者生前の出版とも云えるのであるが、『をりにふれて』も遺著とは云え生前原稿が整理され、旧稿に一々丹念な加筆がなされ、書名までつけてあつた」と記されている。

死の翌年以降の出版物に、詩歌集『巴里心景』（甲鳥書林、一九四二年）、『西洋近世哲学史稿』（上下、岩波書店、一九四四・四八年）、『現代フランス哲学講義』（岩波書店、一九五七年）、『九鬼周造全集』（岩波書店、一九八〇～八二年）がある。

九鬼周造全集（岩波書店刊）総目次は次のとおり。

## ◆第一巻

「いき」の構造

「いき」の本質〔「いき」の構造〕準備稿

巴里心景

滞欧中小品

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

Glauben und Wissen

Propos sur le temps

Choses japonaises

(付) 訳文篇

信仰と知識

時間論

日本の事

◆第一卷

偶然性の問題

偶然性に関する論考

偶然性（博士論文）

偶然性（講演）

偶然化の論理

偶然性の基礎的性格の一考察

◆第三卷  
人間と実存

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

論考

時間の問題——ペルクソンとハイデッガー

文学の時間性（講演）

日本的性格について（講演）

仏蘭西哲学の特徴（講演）

Caractères généraux de la philosophie française

哲学辞典項目（持続、生の哲学、生命、創造的進化）

第四卷

文芸論

文学の形而上学

風流に関する一考察

芸術と生活の融合

情緒の系図

日本詩の押韻

第五卷

をりにふれて（遠里丹婦麗天）

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

未発表隨筆

押韻論

邦詩の押韻に就いて

日本詩の押韻〔A〕

日本詩の押韻〔B〕

第六卷

西洋近世哲学史稿 上

第七卷

西洋近世哲学史稿 下

第八卷

現代フランス哲学講義

第九卷

講義 現代哲学  
講演 現代哲学の動向

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

●第十卷

講義 Heidegger の現象学的存在論

付 Heidegger, Vom Wesen des Grundes

演題 Bergson, Essai sur les données immédiates de la conscience

Boutroux, De la contingence des lois de la nature

Leibniz, Discours de métaphysique ; Monadologie, etc.

Descartes, Méditations métaphysiques

Husserl, Méditations cartésiennes

Bergson, La pensée et le mouvant

●第十一卷

講義 文学概論

講義 偶然性

●別巻 (資料籠)

「こや」に就いて

「こや」の構造 (『思想』掲載稿)

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

詩歌  
短歌習作（パリ時代）  
詩 短歌ノート  
「偶然性」資料  
文学概論研究  
年付譜

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com